

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成18年
3月号

毎月23日発行
通巻427号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成18年3月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷株式会社
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



津軽の鬼コ 青森県弘前市 石田勝利さん撮影(文・6頁)

昭和37年2月3日 玉緒祭法話より

マメマメしく暮らす

法主 矢追 日聖 (51歳)

伝統行事の意味を考える

今日は大倭教においての玉緒祭たまのおまつりです。世間では節分として、お宮さんとかお寺で、色々な行事が行われておるんです。幸いにして非常に天気がよろしいので、さぞ皆さんもお喜びのことだと思えます。

最近の子供さんは、あまり知らないと思ふんですけれど、ひいらぎ柊という葉の先に棘の出てる、ちよつと突かれると痛いような葉っぱの木があるんです。その木の小さい枝と、短い箸くらいの棒の先に鯛の頭を突き刺したものを、この二つを合わせて、節分になると各家々の門口に挿したもののなんです。最近でも田舎では見られますけど、都会の方はこうしたことは、あまり知らないと思ふんです。私達が子供の頃には、親達がやってきたそのようなことを、これ一体どういうことだろうと思つて、色々疑問を持つたりしたんです。

このような伝統的な行事は、すべて形でもつてものを表わすという、日本古来の神道なり、日本の宗教の一つのいき方なんです。それは仏教のように、言葉とか哲学で人に説明をしていくというんじやなくて、形の中に教えがあり、形の中に神様の道というものがあつて、形の中に教義というものが含まれておるんです。今の時代になつてきて、色々とその形から推して説明をすれば、一つの宗教哲学というものが、そこから生まれてくる

いうことになるんです。

この伝統行事の意味をよく考えますと、節分というのには、「生存知のように年の分かれ目ですから、年越しということ、つまり、昭和三十六年度というものが消えてしまつて、これから昭和三十七年度に移り変わるということ。人間の年齢も昔は節分という年越しでもつて、年が一つ増えたことになつたんです。三日の今日が最後の日で、明日の四日は立春。いよいよ冬というものが今日でおしまひになつて、明日から春になつてくるという、季節の分かれ目なんです。日本の神道においては、季節ということが非常にやかましく言われてきたので、着物でも、冬物はいつまでとか、合い物はいつ、夏物はいつからとか、或いは住まいの建具にしても、これ皆季節があるんですね。

今日は、そういう一つの分かれ目になつておるんですが、過去一年間人間として暮らしてきた中において、色々なことがあつたわけです。自分が意識しないでも、やっぱり罪を作つておつたようなこともあるだろうし、或いはまた人に迷惑をかけた場合もあるだろうし、また自分の心の中において、邪なことを考えたこともあるだろうし。そういうように、済んだ過去を振り返つてみれば、色々反省をしなければならぬことが、お互いにあるわけですね。

そのような過去の色々な、いわゆる枉罪（まがみ）、これを神道では罪とか穢れとかいふ言葉で表わしてゐるんですが、そういうものを、全部捨てて追いやつてしまつて、清浄な気持ちにおいて、新しい年を迎えていこうとする行事ということに、今日はなつております。過去の枉罪を持つて年を越すということは具合が悪いから、一切もう洗い流してしまふ。

そこでは、過去のそうした罪穢れというものを

悪魔と仮定しています。それが豆まきという一つの行事に表わされてゐるんです。「福は内、鬼は外」つて、年男とか有名ながよくやつておりますけれども、過去一年においての人間の、あまり芳しくない事柄というものが、鬼に例えてあるんですね。だから、そういうものは、もう今日限り全部よそへ出て行つてもらふ。そうして、福は自分の家の中に来てもらふ。そういうことを形でもつて表わすんですね。

特に豆を使つておるといふことは、日本の昔からの言霊（ことば）という考え方からきてゐるんですね。言葉の音には一つの魂がある、言葉には霊魂があるんだということ。豆というのは何も大豆、だけじゃないんですけれど、この大豆を見れば誰だつて「マメ」といふ言葉が出るんですね。

日本の古い言葉では、人間が健康であつて幸せであるというような意味のことを、マメと言うんです。よく働く人を、マメマメしく働くとか、気の軽い人は、あの人は気マメな人だとか、マメが付くんですね。中国の言葉では、大豆とかのようにな、「ズ」と呼ぶんですね。日本読みにするとかマメと読むんですね。それで、この今の季節の分かれ目の行事にも、そのマメという言葉を出さるがために大豆を使うんですね。

だから、話しは別ですけれども、棟上げをするとか、結婚するとか、お祝ひとか、何かめでたい事があると、魚の鯛を使つてゐるんですね。これは「メダタイ」というから「タイ」が鯛に通じてゐるんです。それで鯛を供えておけば、誰だつてああメダタイなというように、言葉の中に一つの言霊が働きます。

そういう具合になつてゐるんで、過去の一年間というものは、もう暗い過ぎ去つた年であつて、あくる日から新しい年を迎える、春が来る。新しい

春を迎えたら、マメでもつて一年間を暮らしていこう、マメマメしく暮らさしてもらおうと。健康で朗らか、明朗で幸福なという言霊がある豆を撒くことによつて、鬼というものが、外部へ全部逃げていつてしまふところから、この節分の行事には、仏教も神道も、お寺でもお宮さんでも、宗教を問はずして豆を使つてゐるんです。

こうした宗教的な行事、或いは神事を、我々日常の生活の中において、何か意味を持ち、関連性を持ち、直結したものにしなければならぬんです。今申しましたように、今日は一年においての継がい目、年の変わり目の行事ですから、これをよく考えて、日常の我々の生活の中において、嬉しいことは覚えておつてもよろしいけれども、過去一年間においての嫌な思い出、或いはまた自分の良心に恥じるような行いとかは、全部反省して流し、鬼に仮定して福豆で追いやつてしまおうと。そして、清浄な心において新しい年を迎えていこうという、心の転換もしなければいけませんね。

玉緒とは

大倭におきましては、今日のこのお祭りを、玉緒祭という名前にしてあるんですね。「タマノオ」の「タマ」といふのは、霊という字、あるいは玉と書いてもよろしいけれども、魂、心、霊魂、日本ではそういうようなことを「タマ」といふ言葉で表わしてゐるんです。それから「オ」は緒、紐です。我々人間の霊魂、一人一人の肉体の中に入つておるところの霊魂の緒、霊魂の紐の祭という意味で玉緒祭という名称になつてゐるんです。

我々の心臓が動いておる、そして血液が循環しているという神秘的なことをよく考えた時に、大自然の宇宙の中にある、目に見えない一つの力と

いうものと、我々個人の心につながっている目に見えない何かの紐があるはずなんです。その紐のことを霊の緒と言ってるんです。

我々が「ご臨終です」と言われた時、息がポトッと止まった時にですね、この霊の緒というものは、肉体からポツンと切れてしまうんです。今まで肉体を動かすために、宇宙と人間の体とを結んでおった、目に見えない一つの線というものが切れてしまえば、もうそれでいいです。靈魂だけが宇宙に戻り、肉体は腐っていきいんです。

また、人間は霊の緒によって受胎するんです。子供が胎の中で宿った時には、もうちゃんと一本の線が胎の中に入っている。赤ん坊のところに来てるんですね。その線があるから、十月で一人前の体になっていく。我々ホギャツと生まれた時には、臍の緒によって肉体はもちろん大きくなくなってきたんですけども、また大宇宙と人間とをつなぐ、目に見えないこの霊の緒が、もう一つあるわけなんです。

さて、我々がどうしたら死ぬか、また、病気になるかという問題ですけども、宇宙とつながっているこの線が弱くなったり、細くなったり、或いは虫食つたりというような現象が起こってくる。と、肉体があまり正常ではないということになる。だから常に我々は、息切れる時機がくるまで、霊の緒の紐はしっかりと保存しとかなきゃいけない。けれども、なかなかその霊の緒に気が付かない人が多いんですね。霊の緒というものは、肉体を持つてる我々の心の中に直結してるんですから、体全部の神経に働きかけてるんです。だから霊の緒が故障を起こす原因は、精神状態が根本問題になるんです。

分かりやすく言うと例えばね、自分であれやこれやと、ろくでもないことを考えてみたり、或いは

また、大宇宙の心、言い換えれば神意に逆らうような心になれば、その霊の緒のどこかに傷や故障が起きてくるんですね。心に心配事があれば、顔の色も青ざめてくるとか、体のどこかがだるくなってくる、目がくぼんでくるとか、肉体にそれが出てくる。或いは食事一つでもうまくない、味がなくなってくるというような現象も出てくるんです。

だから肉体というものは、口からご飯やおかず、お菓子などを食べていけば、とにかく健康を保っておるように見えますけれども、そのもう一つの生かしておく力というものは、大宇宙から霊の緒を通して来ておるんです。肉体の栄養と心の栄養の両方が具備してこなければ、本当の健康とは言えない。健全なる肉体に健全なる精神が宿るとか、健全なる精神の者は健全なる肉体を持つと言うのか知りませんが、昔の人もそういうように考えておったわけなんです。

肉体と精神のバランス

肉体と精神というものは、不二一体の関係にある。肉体の栄養カロリーも計算しなければいけないけれども、心の栄養カロリーも計算しなければいけない。つまり、バランスの問題になるんです。肉体と心がアンバランスでくい違いがあれば、体に故障が起こって病気になるような現象が出てくるのは本当なんです。けれども、案外そういうった精神方面のことは、忘れがちになるんです。

私が言うところの霊の緒というものが健康であり、また太ければですね、まあ自分の持つて生まれただけの命は貰えるわけなんです。ところが、精神的栄養が欠乏した精神的貧困者であれば、その霊の緒というものは痩せ細ってくる。自分に合

うただけの霊の緒を持つて生まれていながら、心の持ち方によってそれをすり減らし、自分でその線を細くした場合、そこに霊の緒のエネルギーがかかってくれば、必ず肉体のどこかに故障が起ってくる。また、自分の持つてきた寿命だけ生きられなくなってくる。或いはまた、命があつても半病人で、結局五年も十年も寝床で住まいするということになることも限らないんです。大宇宙から自分の肉体に、生きるという力、生きさしてもらう力を充分に送ってくる霊の緒を持つていながらですよ。

だから霊の緒というものは、宗教的に考えてみても、我々の健康の上から考えてみても、非常に大事な紐であるんです。これはもう誰でも彼でも生まれた時に、ちゃんと天から下がつてきた紐なんです。自分はその紐は嫌や言うたつて、これは付いてきてるんです。

そこで我々は、今日のことした一つの記念日を通して、霊の緒ということ十二分に自覚しなければいけない。我々は自分で生きておるんじゃない、天地自然の力によって、生かされておるんだということを一歩先によく認識しなければいけないんです。その霊の緒に力があるよう充分に弾力性を持たし、生まれた時の霊の緒はそのまま死ぬまで持つていけるように、自分の精神状態を常に穏やかにもつていなければいけないんです。

自分の精神状態を穏やかにして、尚且つ自分以外の人も喜ばすような行為があつた場合に、自分の精神的喜びというものが、だんだんと増えてくる。精神的な喜びというものが増えれば増えるほど、霊の緒というものは、やはりそれだけ力が出て、太くなってくるんです。つまり、ゴムが風邪引いたようにならないで、弾力性を持った太い霊の緒になってくる。それは、いわゆる生命力が旺

盛であるということ、要するに健康に幸せに、長生きできるということになるんですね。

我々の寿命というものは、ただ口から食う食料だけで決定するものではなくて、その霊の緒の如何によって決まってくるものなんです。だからして、宗教的に平たく言えば、自分で善根功徳を積むというような生き方、人の為になることもしてやろう、或いは社会一般の人の為にも喜ばれるような行為をしてやろうというような生き方、自分の心の中に本当に喜びを持てるような行いでですね。そういうような行いを度重ねることが、自分の霊の緒を太くすることになり、自分の心の榮養になつてくるんです。そうした時に、やはり天から授かった自分の寿命だけは、充分に生きさしてもらえ、喜びをもった人生が出てくるということになるんです。

人の幸せを共に喜ぶ

人の為にしてあげようと思つても、我が自身に能力がなければ、できないことですけれど、そういうような心構えが大事なんです。仮に自分ができなくても構わない。人の幸せを共に喜んでやろうというような気の持ち方ですね。行為としてできなくてもです。

けれども私は常に世間を見て、非常に嘆かわしく思うことは、人が不幸になつたことを喜ぶというような人が多いことですね。人が仮に事業に成功した場合、また何か立派なことをやって表彰された時に、ほんまに自分の心の中から、ああよかつた、やあ結構であつたと喜べる心の状態になることが、私は最も望ましいと思うんです。

ところが私は五十年生きてきたんですけれども、案外世間の人達は、表向きはいいことを言っ

て裏へ回ると、人が順調に事を運んでいくとか、だんだんと経済的に恵まれていくとか、要するに世間の人から見て成功していくというような場合、それを陰でもつて非常に妬む。或いは、あることないこと、あつちやこつちや言い回つて、相手の人をかち落とそう、恥かかせてやろうというようなことをする。敵愾心か妬みかもしれませんが、けれども、日本人の場合そういうような人が、いかに世間に多くおるかということに、私はいつでも情けなく思うんです。

なぜ人が成功した時に、それを見て自分自身も嬉しい気持ちになれないかと思うんですけれど、結局日本人は気持ち小さいというのか、妬む、僻む。これはもう、何とかして直さなければいけないと私は思うんです。

皆さん方も、こうして信仰されて神さんに手を合わせるということは、自分達が神さんの気持ちに近付くためなんです。

神様というものは、我々人間のはるか彼方に居られる、完全無欠な人格者であるという——これを一つの仮定ですよ——そういうような理想の目標を定めて、我々できていない人間が、そうした偉大なる超人間的な神さんに一歩でも近付くように、その神さんの足型でも踏めるような人間になろうと努力するところに、一つの信仰があり宗教があるんですね。

この世の中というものは、苦の世界であるとか、或いは、この世はとかく住みにくいか夏目漱石のような偉い人でも言うておられたらしいんです。住みにくいんじゃないかと、自分達で我々心の中において、住みにくいようにしているんですね。お互いにそういうような気持ちを持つておるから、一つ家から外に出れば、世間体、世間体とか、世間ばっかり口にするような社会になつているん

です。日本の社会というものは、なぜ世間をそのくらしい気にせんらんか。なぜ世間の人がかう言うからそうせないかんのか。

世間の人にこだわるといふことは、人の陰口を言うとか人に恥をかかせるとかいうような、いやらしい空気が世間にあるからなんです。世間にとられられない人間ばかりが集まつた社会というものができれば、地上は天国です。これは、我々の理想とする世界ですね。そういうような世界にするためには、我々が手を合わせる神さんという一つの目標、一つの形になるべく近付くように、自分を磨き上げていくというのが、信仰の実体でもあるんです。

大倭というものは、常に申しますように、神さんを拜んで神さんに願かけて、つまり一つの報酬としてご利益をもらおうというような、いやらしい意味においての信仰ではありません。そんな交換条件を持ったような信仰であれば、もう始めからやめといたらいんです。それよりも、我々自分自身が神様という目標に対して、一歩一歩近付くようにすることです。それは、我々の小さい家庭の中においても、或いはまたこの社会においてもです。

お互い遠慮気兼ねなく、本当に束縛のない気持ち、自由な世界において、みんなが笑いながら幸せにマメマメしく暮らしていくというような社会の訪れることを我々は念願して、大倭教という一つの宗教として立つておるわけなんです。ですから、私達がそうした一つの理想とするような人間になるように、自ら努力して、肉体の方も精神の方も榮養を十二分に摂って頂いて、大倭教の信人として恥じないような皆さんになつてもらおうことを、心から念願してやまないんです。

これで終わります。

こもれる魂魄の地を 訪ねて

兼田 隆

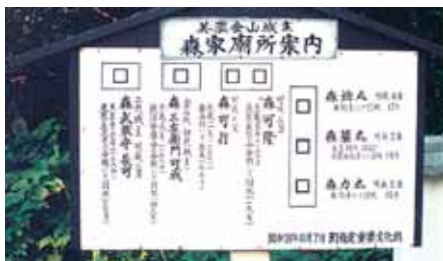
〔第24回〕可成寺

岐阜県可児市兼山に可成寺と言う寺院があります。戦国大名の森一族の菩提を弔う為に建立されたお寺です。

戦国期の動乱の時代、森家は織田 豊臣 徳川と主家を代えながら家名をのこします。中でも本能寺の変で信長と共に討死した森蘭丸の知名度は高いと思われまます。

可成寺の名前の由来にもなった森可成には、蘭丸を含め六人の息子達がありますが、六男の忠政を除き、ことごとく討死してしまします。

森可隆(長男) 元亀元年(1570) 四月、織田方で参戦、初陣の越前手筒山の戦いで討死、享年十九歳。



森長可(次男) 天正十二年(1584) 豊臣方の武將として徳川方と戦った小牧長久手の戦いで討死、享年二十七歳。

森蘭丸(三男) 享年十八歳。森坊丸(四男) 享年十七歳。森力丸(五男) 享年十六歳。この三兄弟は天正十年(1582)の本能寺の変において討死します。

六人の父でもある森可成も織田方として参戦した近江宇佐山の合戦で、



長男の後を追うように、同年九月に同じ運命をたどりまます。享年四十八歳。このように父と兄達の死を乗り越えた六男の森忠政だけが、徳川期の外様大名として津山藩十八万六千石を治め、家名を残していきます。

八月の末、蝟が高く美しい声で鳴いていた頃に可成寺を訪れました。山門をくぐり森家の墓蹟に近づくと一枚の看板が目に入りました。

看板には、森家の廟所位置と町指定重要文化財の期日が記載されていました。私は少し驚き、何か奇縁めいたものを感じました。看板に記載されている期日は私の生年月日でもあったからです。

〔第25回〕四つ塚さま

西に百々の酒屋がなけりや
若い侍 殺しやせぬ……。

この唄は岡山と兵庫との県境にある土居地方で、ある悲惨な事件を基に手毬唄として幕末から明治にかけて唄われたものです。

元治二年(1865) 2月、明治と元号が替わる2年前の話ですが、4人の勤皇の志士が、百々と言う所にある造り酒屋を訪れますが、使用人の誤解により強盗に間違われてしまします。志士達は必死に誤解を解こうとしますが、村中は大騒ぎとなり、約五里(20キロ)先の土居の



地まで逃げのびまます。最後は武器を持った村人3百人ほどに囲まれ、無残な死を遂げてしまします。というのが、この唄の元となった事件の顛末です。

4人の志士とは土佐藩脱藩の井原応輔(24歳)、島 浪間(23歳)、千屋金策(23歳)、元岡山藩士の岡 元太郎(30歳)という面々で、なかでも島 浪間は天誅組や禁門の変の虎口を脱した歴戦の勇士とも言うべき志士でした。

強盗として取り扱われた4人の死骸は、河原に捨てられました。後日、村人に事の真相が徐々に判明、勤皇の志士だと言う事も知れ渡ります。この悲惨な事件を哀れんだ村人は4人の死骸に少しずつ土を盛り始め、参拝するものが日ま

しに増えたとの事です。これが「四つ塚さま」といわれる由縁です。

現在、四つ塚さまは土居小学校の運動場の傍らに改葬されており、私が訪れたときは空蟬が樹木にしがみついている7月の終わり頃でした。故郷から遠く離れた土居の地で、非業の死を迎えた若き草莽の志士達の墓前に立つと胸が締め付けられる想いがします。

山家なれども土居の村ア名所
今日も参ろで、四つ塚さまへ
花を立てましよう、手毬の花を
ヒューミーヨーいつまでモ



逍遙遊を求めて……

見知らぬところへ人に出遭ったときびびりやいやいやの巻

奈良県橿原市 伊藤 克夫

シエリー、見知らぬところで人に出遭ったとき
どうすりゃいいかい

シエリー、俺ははぐれものだから、
お前みたいになまめく笑えやしない

尾崎 豊「シエリー」より
最近、二トや引きこもりといった言葉をよく聞くようになったが、僕が大阪のある不登校生が通うフリースクールと関わるようになって3年近くになる。彼らが普段どのようなことを考えているか聴く機会があったのだが、それを聴いて抱いた印象は彼らの多くが人を踏み台にしたり押しつけたりしてまで自分だけ出し抜くようなことをしたくないと考えているように感じた。彼らは受験中心の学校に対して身体から拒否反応を表しているように思えた。彼らの親御さん達を交えての懇親会では、最近よく言われるようになった「勝ち組」「負け組」といった言葉をどう捉えればいいのか、団塊の世代とそのジュニアたちの価値意識の違い、六十年代に盛んだった学生運動の話などさまざまな話題が花を咲かせた。

何年前かに「ラストサムライ」という映画が話題になり観られた方も多いと思うが、明治維新の境に和魂洋才（漢才）という旗を掲げ日本が以前の日本と変わっていく頃を描いた映画だった。僕はこの映画を観たとき、日本の歴史上、国賊第一号といわれた長髄彦のことを思い浮かべると同時に、歴史というものがいかに違う角度から光を当てれば、全く違う像が浮かび上がるかということを考えさせられた。具体的には官軍と国賊は正義

と悪に置き換えられ、歴史は官軍の立場から記述されることが多く、敗れた側の想いは歴史から切り落とされ忘れ去られていくことが多い。

人と人は何故争いあうのか。人が人を理解できると勘違いするからだといえ、多くの人がびびりされるかもしれない。でも、人と人は理解しあえないかと思っているほうが実は、争いは起きにくいのではと考える。何故かといえ、自分と他人が同じ土俵の上で生きていくと仮定すれば自分と他人との差は優劣に還元されてしまう。これは内田樹さんという人の言葉の使い方をお借りすると、度量衡が違う人同士の差異は優劣ではなく単に違いがあるということにすぎない。度量衡とはものの量などを測るとき基準という意味を人の考え方の単位に置き換えて使われている。争いというのは人を自分の型にはめようとする時に起こるとすれば、自分と他者の違いをそのまま認め合う道をなんとか探し出そうとすること減っていくともいえる。

見知らぬ場所へ人と出会ったとき、コミュニケーションというものはどのようにして成り立つだろう。自分の殻に閉じこもり出てこれない人は他者と親しくすることに勇気をもてないでいる。李章根さんから以前、彼が関わっていた引きこもりのIさんの記録ビデオを見せてもらったときにも感じたことだが、当事者の方は他者が自分の立場になつてわかつたかのような事を言われることに、一歩間違えれば偽善を感じたり怒りを感じ

たりしてしまう。何故そうなるかはまさに、度量衡が同じだという前提にたつて周りの人たちが接しようとするに関係しているのかもしれない。人と人との関係は一歩先においてはどのようなようにでも変わっていくける水のように自由なものであつて欲しい。そのためにこそ、教育は同じ度量衡をつくりだすのではなく、違う度量衡を受容するためのものであつて欲しい。

最後に自由なテーマでということを書く機会を
をいただき、自分なりに少し勇気がもてたことに
感謝します。

鬼の正体

石田勝利

悪者扱いされる鬼。しかしその一方神格化される地方もあるのです。津軽の地もその一つ。神の守護神として鳥居に祀られている所が三十八ヶ所在り、「津軽の鬼」と親しまれています。千数百年を経てもゆ来を知る者は無い。でも鬼伝説は残されている。「村の長者の娘欲しさに一晩で刀を十振り鍛えた」「鬼が村人の為に一晩で開拓用水路を作ってくれた」「冬になると鬼が山から降りてきて、鉄の農具を作り又山へ帰った」等々、全て好意的で利益を与えたものばかりである。

鬼が戻つた山の名は「敵鬼山」と呼ばれた。敵かな鬼の山と称えていた山は、今の「岩木山」。近年麓に三十四基の鉄精錬炉が発掘されている。という事は、鬼は人間であるが異様な姿の渡米人であると想像できる。彼等は鉄作りのテクノロジーと知恵に長けていた。余りの強さにある種の恐れをも抱いたのが悪と変じた原因と思われる。「鬼の力を借りても」「鬼に鉄棒」、これは鬼の知恵と製鉄技術の意味が隠されている。鬼集団の正体はスサノオとその一族でしかあり得ない。

寸 莎

第68回

片山久子さん

ひとり立つ

十八歳の時、家出をした。小さな荷物を一つ持って、生まれ故郷の九州福岡市を出た。特に何かあったというわけではない。あえて心理的理由を考えてみるならば、久子さんの中にくすぶる冒険心が思春期と共に顔を出して来たのと、厳格な父親小市さんから逃れたいというのがあったのかも知れない。

具体的には、小学生時代からの友人が結婚したがあえなく離婚。家を出たいというので、「じゃ私も一緒に出るわ」という感じだったという。家出先を見つけれないようになると二人で思案した結果、巡業で博多に来てから後に、四国を廻るという劇団のオーディションを受ける事にした。見事入団出来る事に決まる。劇団の名は「御園劇団」。座長は御園加代子さん（この方の先輩に現在も



ご活躍の森光子さんがおられる）、脚本は吉住完さんが書いた。こうして久子さんは、御園加代子さんの内弟子として、踊りとお芝居の道に進む事になった（写真は当時むらさきこうたを踊っているところ）。

その内に一緒に家出をした友人は不安になり実家へ帰ってしまった。久子さんは、一度自分で決めたからにはその中に入り込み辛抱するということ一本気な性格もあつて、結果的には三十四歳まで続ける事になる。

三十三歳の時、師が帰幽された事もあつて一年を経て劇団を去る。その後、大阪へ出て水商売の仕事始めた。まずは法善寺横町にあつたクラブ「28（ツウエイト）」に勤め、次に大阪で二大キャバレーの一つ「美人座」、そして再び最初のクラブに戻つた。

四十歳の時、初めて自分のお店を持つ。店の名前は「美葉（みよ）」。電話帳を片っ端から調べて大阪にはどこにもない名前をつけた。丁度、大阪万博が開かれていた時の事だ。二年後、三ツ寺筋に二十四時間営業スナック「大穴DAIANA」を

開く。しかし、久子さんは、性格的に水商売にはむいてないのだという。

ある時、お客が、「たかが水商売の女や」と言つた事がある。久子さんは、「たかが水商売の女がどれだけ怖いか見せたるか」と啖呵を切つた。後に謝りに来たらしいが、久子さんは、「私はどんな人でも対等でないから」という。世間の肩書きで人を見るのではなく、人間で勝負していくのが久子さんの性格のようだ。

四十三歳の時、いつまでも水商売もやつていられないと思ひ、奈良富雄の団地で母親の松江さんとマルチーズ二匹とで暮らしながら、屋は近鉄西大寺駅の売店で一年間働いた。

そんな折に、奥様新聞に大倭安宿苑長曾根寮が寮母さん募集の案内を出していたの目止まる。二月のある日、面接に行つて見る事にした。杉本志津女さんが一日かけて実際の介助の現場を見せてくれたという。

長曾根寮での仕事は楽しかった。例えば、六人部屋を一人で半年任される事になり、その間に全員の性格から身体的特徴まであらゆる事を把握してじっくりと関わつた。

正月などは、おせちを食べ少々お酒も飲みながら、着物を着たままの

姿で介助をしていたのも、あの時代ならではの楽しい思い出だ。

五年ほど長曾根寮に勤めた後、精神科も含め三ヶ所の病院で看護助手として勤めた（お姉さんも以前看護助手であった）。その後、志津女さんの勧めもあり定年は大倭病院で迎える事にした。

平成八年、八重垣園に入居。現在は家政婦として働いている。

法子様との思い出は、晩年寝たきりになられていた頃、時々介助に入る事があつた。「痛いとも痒いとも言われず、ただ、すまんのー」ただけ言われるのが不思議やつた。

法主様は亡くならないものだと思ひ込んでいた。それだけに瑞光院で帰幽された姿を見た時は、「何でなん」と思つたら急に嗚咽に変わつていった。

最後に失礼かと思つたが、ずっとお一人で来られたのですか、と聞いてみた。「今まで女が一人で生きて来たとしたらおかしいと思うですよ。店を開いていた頃、信頼の出来る男性で十六年付き合つた人がいたんですよ。お互い縛り合わない関係でした」と語つてくれた。

書き残した興味深い話はたくさんあるが又の機会にしたい。一貫して気持ちよく淡々と語つて下さつた。

（聞き手 李章根）

AWTC日誌

2月12日 祝会。姫路市の李敬烈さんの精神的な勉強をするような集まりに参加して、大倭に一度行ってみることを勧められたという4人の女性や、武道をしていて甲野善紀さんの本を読んだという村上弘志さん(生駒市)が初参加され、参加者それぞれ自分を振り返る時間を持ちました。

またこの日、青山法義 山崎正知 杉本順一さんから9人の皆さんが奈良市の元明天皇陵、十市皇女墓、藤原京近くの額田王墓、天武 持統天皇陵、文武天皇陵等を訪ねました。

2月13日 祝会に参加して1泊された奈良路子(橋本市) 伊東律子(姫路市) 上田朋子

第288回 大倭会文化行事 新緑の奈良豆比古神社

奈良の北東、奈良阪を散策し一日を過ごす。子供さん大歓迎!!

日時 平成18年4月16日(日)
午前10時50分集合
場所 奈良豆比古神社 境内
交通 近鉄学園前にて快速9時49分発に乗り、奈良駅10時着下車、奈良交通/バス2番乗り場で青山住宅行き10時21分発に乗車、奈良阪で下車(この間約10分)すぐ

ルート 奈良豆比古神社(まちかど博物館、樟の巨木の説明、昼食)…般若寺…植村牧場(ポニーや子牛がいます、おいしいソフトクリーム直売)…北山十八間戸を巡る(昼食持参 小雨決行)

世話人 湯浅 芳郎 自宅 0742-48-3389
携帯 090-6987-5847

(加古川市) 唐津輝史代(兵庫県太子町)さんが、教務本庁で杉本順一さんや、姫路出身で以前から李敬烈さんと縁のある李章根さんらと歓談、「和み」で食事をして帰られました。

2月14日 紫陽花邑で鶯の初音が聞かれました。
「今月の昇ちゃん」はバレンタインデーでうきうき。(歯が痛いとも言っていました)
2月15日 大倭神宮月次祭。時節柄チョコレートのお供えもありました。

2月16日 大倭病院職員の芝香須弥さんの次女、白井香織さんに男児(翔琉ちゃん)が誕生。邑の反保隆臣 良夫妻には4人目の曾孫です。

2月17日 菅原園には時々来ておられたのですが、奈良県宇陀市の藤村卓司さんが邑の方に

は十数年ぶりと立ち寄ってくれました。岸野春子さんは菅原園でのご縁で、杉本順一さんは同郷のよしみで歓談。今は無農薬のお米作りを勉強中とか。

2月18日 夜、交流の家でF1WC定例委員会。韓国の忠南大学のキャンパーが参加、「F1WCのメンバーに会うのは久しぶりなのに昨日会ったかのような温かみを感じ楽しかった」と感想を言っていたそうです。

2月23日 午後1時20分より大倭神宮において申孝祭が、2時から大本宮拝殿において月次祭が執り行われました。この日は昭和37年2月23日の法話を聞かせて頂きました。(平成17年3月号『おおやまと』に掲載)

2月24日 菅原園立替工事でしたんだ須賀の道の補修工事。
2月27日 教長矢追家麻呂夫人、文字さんの実母吉岡君枝さんが帰幽されました。享年90歳。
2月28日 大倭殖産榊、土木部門の軸である黄地勇さんが帰幽されました。享年47歳。新年の大倭グループ初出の会では当たり年の人達の一人として挨拶をしてもらったのに……。

3月5日 大阪の大辻正子さんから金屏風一双をご寄贈。大倭会館の作品展等々で使用したい場合は、ご一報下さい。

3月6日 大倭神宮月次祭。夜7時半から大倭会館で邑倭の会が開かれました。

大倭安宿苑では

2月23日 在宅介護の地域包括支援センターを邑内に新設することにになり、この日地鎮祭が行われました。

(菅原園)

2月14・28日 生け花サークルの住苑者 ボランティアの皆さんで新居に色を添えました。引越し後の日常生活もだんだん落ち着いてきました。

(須加宮寮)

2月23日 卓球大会。ころがし卓球・中村ハルコ、シングルス・西村照夫(職員の部) 松岡幸子の皆さんが優勝しました。
3月5日 映画会「ジユマンジ」。居眠りも楽しみのうち? (長曾根寮)

3月1日 日頃お世話になってるボランティアさんへの感謝会を開きました。
(八重垣園)
2月15日 俳句クラブ。「豪雪や越後の駅に握り飯」「このと

編集後記

▼『おおやまと』新聞の編集に関わるようになって十二年が経とうとしている。年数だけが過ぎて行くが、未だ一人前になれない自分がある。それは仕事にしても家庭においても同じである。どうなれば人間一人前といわれるのだろうか。私にはきっと永遠の課題になるような気がしないでもないけど……。(壬)

ATMIC

* 月次祭(大倭神宮)

4月6日(木) 午後2時より大倭神宮にて。

* 須佐緒祭(大本宮)

4月8日(土) 午前11時より大倭大本宮拝殿において祭典を行い正午より各自持参の弁当などで園遊会を行います。
すさのお祭とは、宇宙万物一切の顯幽両面における一体のもとたる須佐(結び)の緒に感謝をするお祭りです。

* 大倭会主催第四四九回祝会
4月9日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。
* 箭負祭(大倭神宮)
4月15日(土) 午後2時より大倭神宮にて。

箭負祭とは、皇祖天神の鎮ります登美の神奈備(大倭神宮)の靈威を法主日聖大恩師の遠祖(箭負氏)が代々祭祀し、神仕えしてきたことを記念するお祭りです。
* 鈴月かあさん帰幽五年祭
4月19日(水) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。
* 月次祭(大本宮)
4月23日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。